昭和61年度臨床相談技術共同開発事業

民間相談機関における臨床技術について

― 就園前障害幼児の指導技術を通して ―

その11　治療者の心的過程

家庭生活研究会　宮崎徳子
伊藤聖子
水島恵一（文教大学）

1. 序　説

昭和56年度以来，前回報告に至るまで，障害児臨床における図式的投影法の導入を（操作的アプローチと現象的体験的アプローチとの統合として）試みてきた。すなわち子どもの理解においては，図式的方法を治療者の洞察およびケース研究の客観性の保障のために用い，親に対しては，以上のほか親自身のカウンセリング的洞察の媒介としても試みてきた。今回は図式的投影法を治療スタッフ自身に対して用い，スタッフの心理的変化の測定・理解と，スタッフ自身の自己洞察促進の吟味を行なうこととした。

2. 目　的

本研究は，図式的投影法を用いて，治療者の認知シェマを含めた上での治療的関わりの認知とその変化・発展をとらえようとするものである。治療的関わりとしては，①治療者（Th）対担当児（c）の二者関係と，②集団治療場面全体の関係，および　③治療スタッフチームの集団関係についてとらえることとする。これらは④治療者自身の認知シェマの変化にも影響を及ぼすものである。

3. 方　法

本研究で使用した図式は，カード式投影法，自己像単純図式，二者関係図式，集団関係図式，総合図式の５種類である。１年を通してスタッフの各々が図式を作成した。測定（図式作成）は昭和60年６月，７月，９月，11月，61年１月，３月に行なわれ，なお follow up として62年３月に行なわれた。以下紙数の関係で前期（６月）の結果をもって方法の例示を兼ねる。

なお本報告では，事例研究的にスタッフの１人Ｓについて１年間の流れを追うことにする。Ｓは新卒で当相談室に就職し，相談室スタッフの一員となった。在学中に２年間の臨床実習経験があるが，そこでは学齢児が対象であったので，幼児の担当は初めてであった。子どもに対する当惑感が強くあり，ぎこちないままにも受容的に担当児についていこうという様子がみられた。一方Ｓの担当児Ｃは，60年５月からグループのメンバーとして通所することになった２歳５ケ月の男児で，家族構成は父，母，本児である。主訴は言葉の遅れ，落着きのなさであった。２ケ月程前から個人相談として月１回の経過観察を経てきた。グループでの初期の様子としては，落着きのなさと自己主張の少なさが目立ち，好む遊び（電車を走らせ，ねころんで見ている）には他者の存在を忘れて没頭するが，他の遊びは表面的で，移り変わりが著しかった。

4. 前期（６月）の結果

①カード式投影法。ここで用いたのは層構造式のものであり，担当児に対する気持としてぴったりと感じられるカード（表１）を選んで最上段に３枚（最もぴったりするもの１位１枚，次に２位２枚として）配置し，２段目には次にぴったり感じられるカードを置く（枚数自由）。これを規定作品とし，これに対してカードの位置に気持によりぴったりするニュアンスをもたせ，必要ならば白紙カードに使いたいキーワードを記して新たに加えうるとした自由作品を次に作成する。

６月に作成されたＳの第１回作品（規定）は図１－１のとおりである。Ｓの内省報告によると，第１段１位の「期待感」は「Ｃが内にこもりがちに遊具に没頭する時

表1　カード式投影法　使用カード群

同　情	自信がない	自分には向かない	逃避的	不　安
疎外感	絶望感	挫折感	当惑感	使命感
意気ごみ	自己満足	義務感	自己防衛的	積極的
無意味さ	充実感	自　信	自由さ	共　感
安定感	期待感	自然さ		

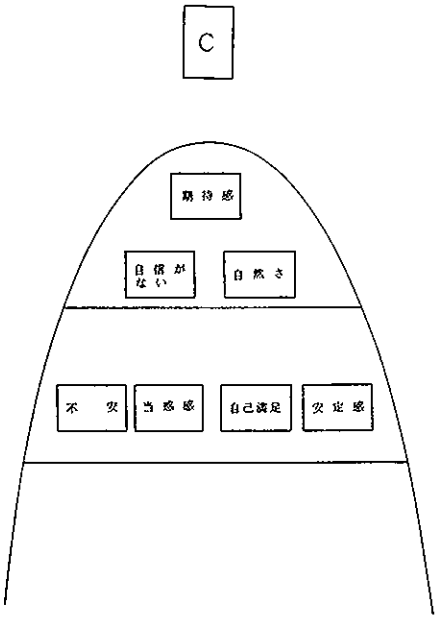

図1－1　6月規定作品

以外は，マイペースながらにSや他メンバーとの間に，即物的情緒的な関係が可能であったこと，子どもらしい好奇心やエネルギーをもっていたことから，望ましい成長の可能性が感じられた」ことに由来している。2位以下の「自信がない」「当惑感」は「Cの現状に対してというよりも，子どもそのものに対する当惑やTh としての関わり方への自信のなさ」などを表わしている。そして「自然さ」「安定感」はThとしてというより「一人の人間として，Cへの関心や親しみ，心配をもつ」ことに対応していたようである。また「自己満足」は「ひとりで延々と遊ぶCに対して，自分自身が自分の存在を有意味なものとして受けとれない」ことの表明である。

規定作品を自由化したものが図1－2である。「期待

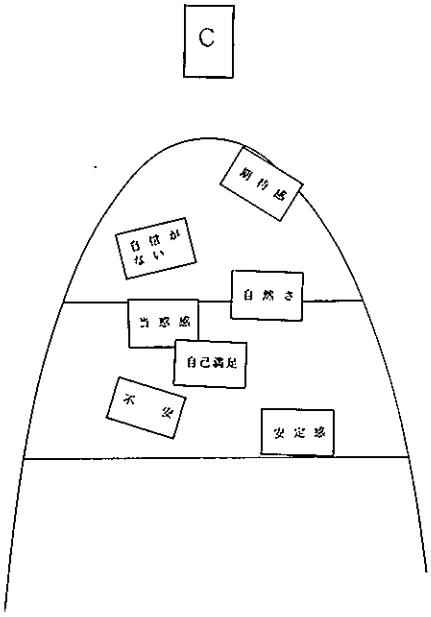

図1－2　6月自由作品

感」「自信がない」は側面に押し出されるようであり，頂上の空白は虚しいながらも2段目の「当惑感」「不安」につながっているという。その一方で「自然さ」「安定感」は positive な要素として並存している。「自己満足」「当惑感」が密接に関係しているのは，前述の「空白」のニュアンスを多少とも具体的に表現したもののようである。

②，二者関係図式。SとCが play 場面（集団治療場面，円によって表わされる）でどのような関係にあったかを，その物理的距離と心理的距離について円型コマのみを用いて図式化する。また関係についてS自身が理想とみなすありかたを理想図として作成する。Sの第1回作品では心理的距離（図1－3）は物理的距離（図略）よりもかなり離れている。また同図ではコマの向きによって，Cを追いかけるSの積極性と，しかしその向きがCと一致できていないズレが表現されている。

③，自己像単純図式。自己の核（円型コマ）と自己の枠（針金）を用いて，担当児に対する自己像を可視的な形にして表わすものである。第1回作品（図1－4）を，自己の核とCとの距離，枠の開きによって測定すると距離：4.3 cm，枠：6.6 cm であるが，テストとしての標準化はできていないので数値的解釈は保留する。

④，集団関係図式。play 場面全体像およびスタッフチーム像は，Sも含めたスタッフと子どもメンバーを円型コマを用いて気持にぴったりするように配置すること

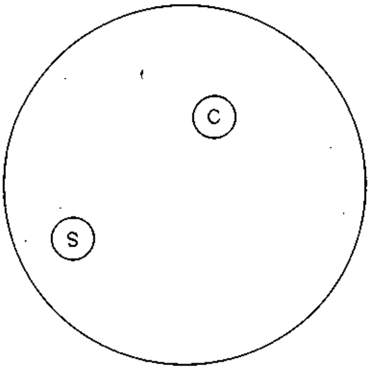

図１－３　心理的図

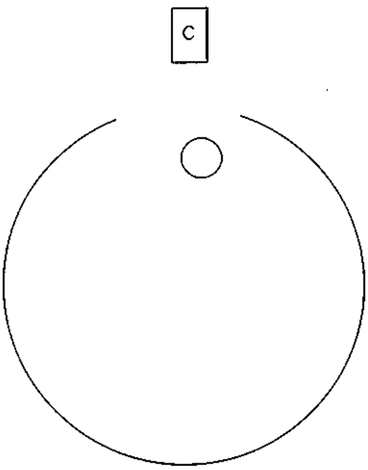

図１－４　６月自己像単純図式

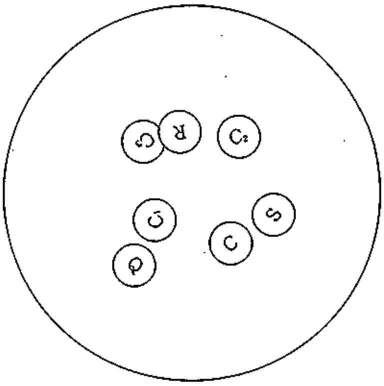

図１－５　６月 play 場面図

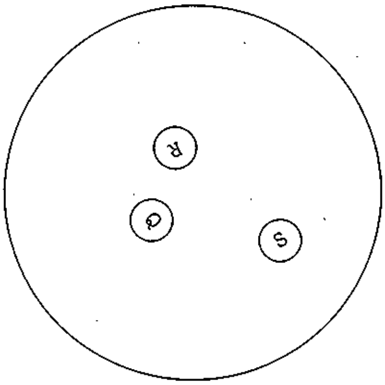

図１－６　６月スタッフチーム像

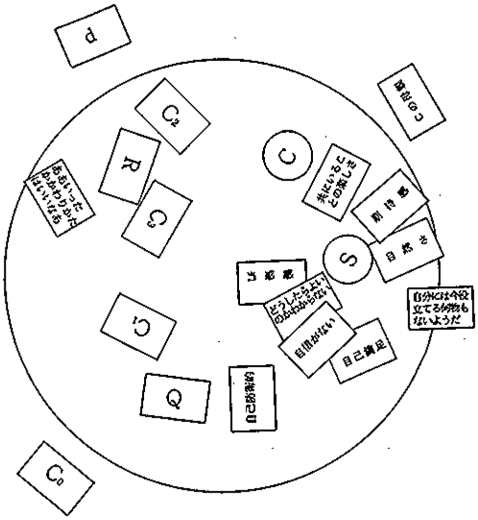

図１－７　６月総合図

で表現される。

Ｓによる第１回の play 場面全体図（図１－５）では，Ｓ自身も他図式に比べてより積極的に表現されているようである。全体としては，子ども各々の動きに各スタッフが対応し，そのバランスが集まって play の場面をつくっているようすが感じとられている。(各スタッフ対担当児のペアはそれぞれＳ－Ｃ，Ⓠ－Ⓒ，Ⓟ－Ⓒ，Ⓡ－Ⓒ，であるが，スタッフＰはこのとき欠席)。

次にＳによる第１回スタッフチーム像（図１－６）をみると，他のスタッフＲとＱは近づいて円中央を向いているのに対して，Ｓは少しはずれたところにあり集団治療者としての姿勢は一応もちながらも，方向づけが不安定であることが表明されている。

⑤，総合図式。これは図１－５からの発展として，スタッフと子どもの背景に感じられるものを加えたものである。すなわち相談室という機関，子どもの周囲や背後

に感じとられる諸々のこと（たとえば担当児の母親，家庭，地域，福祉関連の情報や施設，社会的資源，機構など）スタッフ自身の生活，内面などまでを含めて総合的な認知を問うものである。Sの第1回作品（図1－7）では play 場面を表わす円の外側には，別室で母親面接に参加しているCの母親，その面接担当のⓒ，欠席だったⓟが置かれている。ⓡに対しては子どもたちへの関わりのスムーズさが印象深く，「ああいった関わりかたはいいなあ」との思いが述べられ，ⓠに対してはS自身の「自己防衛」「貧困さを見透かされたくない」という気持が表明されている。

5. 前期から後期への過程

全6回のテストのうち最終回の3月は，Cの就園も迫り，それに伴ってSの問題意識が他の回と著しく異なっているため別に考察することとし，中間の7，9，11，1月の変化を定量化できる面だけについて略述するにとどめる。定量化できないが，とくに重要と思われる点については具体的に記述する。

①．カード式投影法の結果は表2のとおりである。1位カードは「期待感」から「当惑感」「共感」へと変化し，2位カードでは「自信がない」がなくなり，かわりに「自然さ」「安定感」などが出てきている。第2段までを含めて毎回出ているのは「安定感」「期待感」である。

②．二者関係図式は定量化にあたり，コマの距離と向きを示すことにした（表3）。コマの向きおよびニュアンスはa～fの6つの型に大別し，中間型として「追いかけながら同方向を向いている」を「c－a」，「真正面ではないが向かい合おうとしている」を「c－d」のように表記した。心理的距離についてみると，7～11月ではコマの間の距離が大きくなり，1月は急に最小となっている。向きではc→eへの変化の傾向が認められる。理想図では距離は一貫して縮小しているが，向きには明瞭な傾向は認められない。また心理的図と理想図との関係をみると，その距離の差が7，9，1月では1cm 程度であるのに対し，11月には5.7cmの差が出ている。11月の顕著さには他の回よりも〝Cに近づきたい〟という強い志向性が反映していたようである。しかし1月は心理的図において「近いようでもSの方がキョロキョロしていてCがよくみえない」とのSの内省があるにもかかわらず，同理想図との距離の差は顕著ではない。（このことは，治療関係における〝距離〟はそれだけでは一義的な意味をもつものではないことを示唆しているといえよう。）

表3　二者関係図式の変化
SとCのコマの距離を数字(cm)で，向きと配置のニュアンスを次の基準で分類する。

	物理的図	心理的図	理想図
6月	2,5,　b	7,5,　c－e	4,1,　b
7月	4,　c－d	3,4,　c	4,4,　b
9月	2,3,　c	4,2,　c－e	3,1,　c－a
11月	3,　c	8,　b	2,3,　b
1月	2,1,　d	3,　e	2,2,　c－d
3月	1,2,　d	4,5,　d	0　a

a：①①同方向を向いている。b：①⊖sがcに向かっている。c：⊖⊖sがcを追いかけている。d：⊖⊖向かい合っている。e：⊖⊖異なる方向を向いている。f：⊖①cがsに向かっている。

表2　カード式投影法におけるSの使用カードの整理

	1段目			2段目
	1位	2位(左)	2位(右)	
6月（図1－2）	期待感	自信がない	自然さ	不安，当惑感，自己満足，安定感
7月	期待感	安定感	自信がない	自己防衛的，自然さ，当惑感
9月	当惑感	義務感	自然さ	共感，安定感，期待感，自由さ，不安
11月	当惑感	自然さ	期待感	安定感，不安，意気ごみ，挫折感，無意味さ
1月	共感	安定感	自由さ	不安，期待感，意気ごみ，自然さ
3月	共感	不安	自由さ	期待感，自己防衛的，安定感，自然さ

③，自己像単純図式。Sの作品の変化において，担当児と自己の距離を枠の開きに明瞭な傾向は認められない。（表4参照）しかし枠の形についてみると，11月と1月において不規則さが目立つ。9月まではわりあい安定した形であることと，カード式投影法において11月，1月に「意気ごみ」が新たに登場していることなどをあわせて考えてみると，Sの治療的態度の内的な一側面がうかがわれるが，明瞭な意味は見出されていない。

④，集団関係図式。play 場面全体像については，表示は省略したが，場全体がまとまりに向かうような傾向が認められる。すなわち大まかにいえば，6，7月の各ペアのバラバラな配置から9月のペア単位の顕著化，それぞれのとりくみかたの個別化を経て，1月には子どもたち自身が多少とも場の中心に向いているようなニュアンスが表現され，スタッフもそれに個別的援助的に関わっている。またスタッフチーム像に比してコアの配置に調和的な安定感がみられるようであり，このことは（子どもたち各々の治療的変化も反映されて）スタッフのまとまりが子どもを基盤としたものとして認知されていることを示すものであろう。

次にスタッフチーム像（表略）についてみると，7～1月に共通の点としては，全員が一応は中央を向いて配置されているが，そのセッションごとの状況を反映していて，一様な傾向は認められない。そして変化では，Sの中で®が相談室の主任であるという認知が大きくなってきたこと，そのため®との心理的距離が一面において離れるなど，集団内での人間関係の認知がより現実に即したものとなってきたことなどである。

⑤，総合図式。8月作成の図では6月図と大きくかわらず，C，Cの母親，母親担当の㊋のみはっきり意識され，他のメンバー，スタッフなどについてはやや漠然としている。これに対して1月図では，Cへの思いやS自身の自己観察，Cをとりまくものへの関心，Sの内面などについて，より豊かな描写がなされているが，紙数の関係で図は省略する（後期の図3－5に近い）。

ここで前期から後期への過程を集団治療記録の大まかな流れとあわせて総括しておきたい。まずCの変化を中心にみていくと，7月，Cのひとり遊びにSが〝電車に対する通行人〟として関われるようになった。9月，Cなりのペースで S に追いかけっこなどを働きかけるようになった。10～11月，名前を呼ばれると確実にふり向く。12月，Sにだっこ要求を出す。1月，浅く流れがちだった遊びがCのペースで，満足を得ながら移っていくようになった。全体的にいえば，当初のCの落着きのなさが，次第にCなりのまとまりをもつようになり，他の子どもやスタッフへの関心も増してきたとみることができる。そしてこれはSにとっては，Cとの間の疎隔感を減少していく裏付けでもあった。しかしS自身の中には，Cなりの成長の中でも，まだ電車遊びへの固執が残っている点などに対して受容的になれない構えも残っていった。このSの硬さは，1月時点での「自分の関わりがCの志向に直接結びつかない場面が多くなった」という内省に

表4　自己像単純図式の変化

	自己像単純図		自己像単純図
6 月	□ □－○ 4.3 cm ワク開き 6.6 cm	11 月	6.3 6.5
7 月	3.5 5.5	61 年 1 月	3.9 6.4
9 月	4.2 5.8	3 月	2 2

よって多少とも自覚されるようになってくる。

次に集団関係については，play 場面を観察・参加・共有的に学習・再認識していくつみ重ねの過程が，Ｓの play 場面認知を，より具体的なものに変化させてきたということがあげられる。このことはスタッフチームの認知が，Ⓡや◎に対しての個別的認知の過程を通して「前関係的なもの」から「具体的な現実に基づくもの」へと変化してきたことの裏付けにもなっていると思われる。また実際にはＳからの他スタッフへの関わりかたに著しい変化はみられなかったが，「チームの中にいるという自覚」は少しずつ増してきたものと思われる。

6. 前期（３月）の結果

前述したようにＣの就園が迫り，治療関係の終了にもあたり，Ｓの問題意識はＳ－Ｃ関係，とくに今まではＳ自身の内省的把握が優位だったところから，あらためてＣの変化・問題点を再検討するところに移った。play場面でのＳ－Ｃ関係の内省では，「自分の言葉がＳに通じると，Ｃ自身うれしそうにうなづき，さらに落着いて次の言葉を出そうとしている場面が印象的だった」と述べられている。（ただしＣの逸脱的行動をＣの自己表現として受けとめるよりも，他児との協調という視点から観察者的，指示的に関わろうとしていた一面もあり，このためかＣとの情緒的共感的なつながりは不安定になることもあった。）またＣの変化は，言葉が増えてきたこと，他児や他スタッフにも積極的に関わり合うようになったことなどである。

① カード式投影法。Ｓの第６回規定作品（図略）では，年間変化の過程をひきついでカードの positive 化が明瞭である。また自由作品の全体的ニュアンスでは，以前よりも第１段への集中化の傾向がみられる（図３－１)。カードについてみると「不安」が第１段に移動しているのが特徴的であるが，この「不安」は以前のＳの内省的ニュアンスよりも，Ｃの新しい生活に対してのＳの「不安」という意味を増した上でのものである。また同様に「自己防衛的」も「Ｃのためにもっと積極的な関わりができたのではないか」という意味を強くした上での表現である。

② 二者関係図式。年間変化から一貫して物理的距離は近いが，心理的距離は離れている。（これにはＳが観察者的であったことも影響しているらしい。図略）また理想図は，距離０，ａ型となっている。これはＳ自身の治療関係観の変化をうかがわせる（表３参照)。

③ 自己像単純図式。第６回作品（図３－２）はニュアンスとして，「Ｃの両肩に手をおいたようなかんじ」だと述べられている。それは「自由な親しいかんじ」「自分の内面が同調的にＣに対面している」の一方で，「Ｃをじっとみる観察者的な雰囲気ももっている」。それは「不安，自己防衛が枠のふくらみや空白のうちに表現され，核はそれにひっぱられつつもやはりＣの方に向かい近づこうとしているようなかんじ」だという。

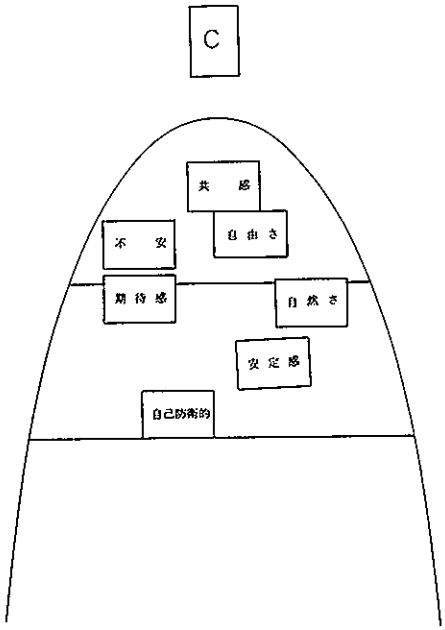

図３－１

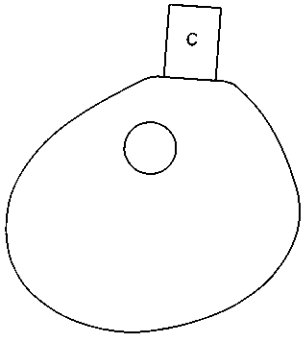

図３－２　３月自己像単純図式

④ 集団関係図式。play 場面全体像（図３－３）は，前期の図が漠然とした内的ニュアンスに依存していたのに対して，play の一場面の具体的なイメージを伴っており，各々の子ども－スタッフ関係を個別的にとらえている。もちろんそのとらえ方はＳなりのものであって，他のスタッフの作品に現われたものとは異なる。

次にスタッフチーム像は，年間変化でみたような各スタッフの個別的認知に近づいている。その中でＳ自身の位置も，より積極的になっているようである(図３－４)。

⑤　総合図式。治療関係の終了期にあたり，Ｓの問題意識も新たになっているため，カード数の増加が著しい(図３－５なおここでは，play 場面を表わす円のかわりに，自己像単純図式で用いている枠を導入して作成している)。とくにＣの側のカード（Ｃの背後に感じとられるもの）の増加が目立つ。それは「Ｃの発音の不明瞭さ」「母親の心配」「相談機関としての社会福祉センターの存在」など，Ｓの外的認知が少しずつ広がっていることを示している。また１年を通じて接してきたＣの母親の「ゆったりした」存在は，Ｃにとって重要なものであることはもちろんであるが，さらにＳ自身の内面の「定定感」にも影響を与えているものと思われる。そしてＳの側についても内・外界の認知の広がりが示されている。

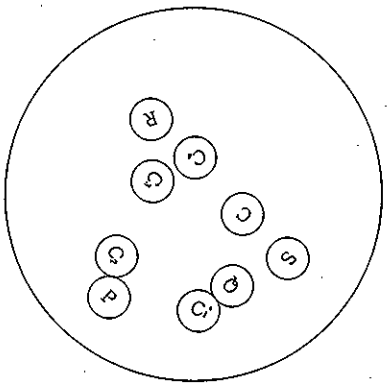

図３－３　３月 play 場面図

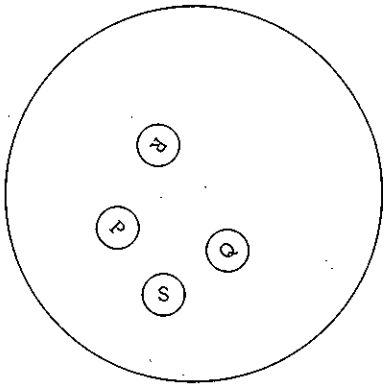

図３－４　３月スタッフチーム像

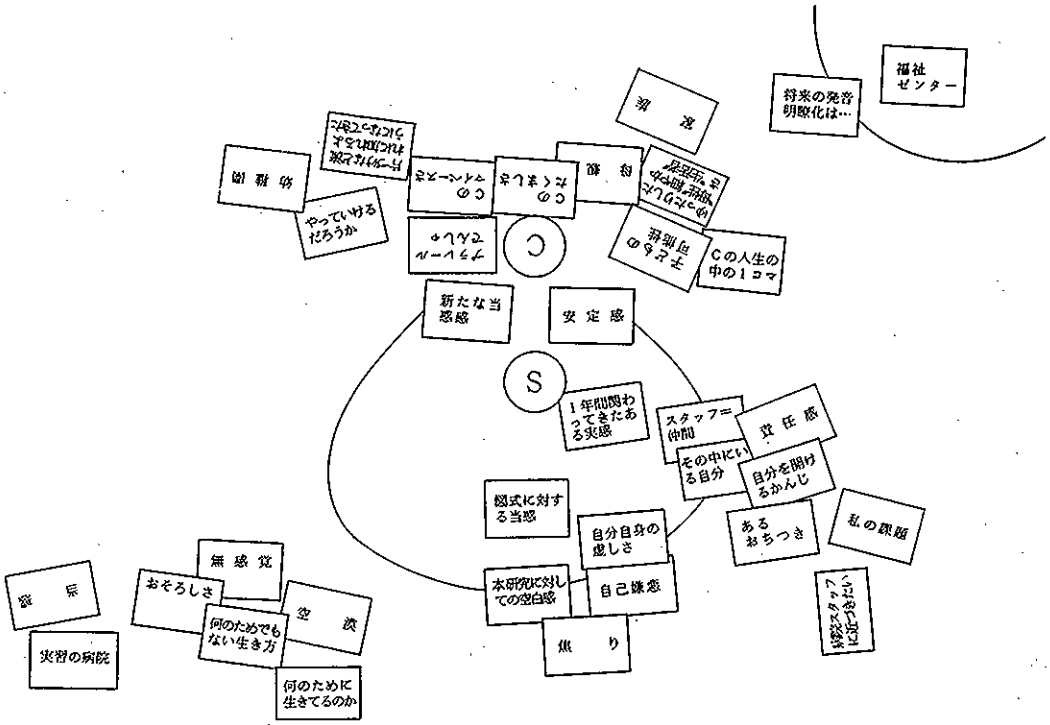

図３－５　３月総合図

スタッフへの関わりでは「スタッフ＝仲間」「その中にいる自分」というような positive な面がうかがわれる。全体的にみて，内面カードの豊富さと外界認知は，相互に関連しあっていると考えることもできる。

7. ケースＳ全体のまとめ

以上，Ｓの図式にあらわれた１年間の変化を要約するとほぼ次のようになる。

すなわちカード式図式では，第１位カードが「期待感」→「当惑感」→「共感」へと変化し，第２位カードは「自信がない」→「自然さ」→「自由さ」という大まかな変化がみられた。１位カードには比較的概念化しやすいものがあげられ，２位カードには，概念化は不明瞭だが他カードとの併用によって同じカードも様々なニュアンスの変化を経ていく過程がうかがわれた。

二者関係図式においては，担当児との距離には一定した変化はみられず，二者間の関係型では心理的図でｃ→ｅ→ｄ，理想図でｂ→ａへと変化の傾向がやや認められた。

自己像単純図式においては，距離，枠の開き，形とも全６回中最も漠然とした第１回作品から，回を追ってその場面ごとのニュアンスが具体的にもりこまれるようになってきた。それは３月図が最も端的に示したところである。以上を総合すると，Ｃとの関わりは期待的，一方的なものから共感しうる相互性を感じられるものになっていったといえる。このことは，二者関係図においてはｄ型（向かい合う）として感じられていると思われる。また自己像単純図では，Ｃに対するＳのかかわりかたが，構えのない（換言すると漠然とした）関わりから，様々なニュアンス，構えをもっていく態度に変化していった。その構えとは単に担当児を対象的に固定してとらえるものではなく，むしろ「Ｃとの直接的なつながりを志向し，その中でこそＣを真正面からみつめることができるのではないか」という積極的・共感的な一面をもったものであるとうかがわれる（それは，二者関係図の３月理想図にみられる通りである）。

一方集団関係図では，play 場面全体像の変化には子どもたち各々の治療的変化が反映されている。その個々のケースが「各々のありかたで社会性の成長を援助してきたのだ」との認知の基盤の上で，「何らかのまとまり」のある「調和的な」ニュアンスが感じられているとみることができよう。

各スタッフへの個別的認知の展開は，チーム像をより具体的な現実に基づくものとしてきたが，play 場面像におけるような「何らかのまとまり」「調和的」なニュアンスは出現しなかった。むしろそれは３月総合図にみられたような「スタッフ＝仲間」「ある実感」という過程につながるものであった。（総合図式におけるＳの実存的内面カードについての考察は省略した。）

最後に図式作成を通してＳ自身が新たな自己洞察を得た点と，認知シエアの変化がみられた点について，Ｓ自身の内省・考察に基づいて簡単に述べておこう。

カード式図式で用いた「自己満足」は配置したとき嫌悪に属するニュアンスをもっていた。しかしそれについて内的な照合を経るうちに，それは漠然とした「臆病さ」を感じさせるものとなった。また◎に対して防衛的であった気持ちも，なぜ◎なのかを考えてみると，◎はしっかりとした臨床理論をもち，迫力をもって治療関係に臨んでいるということ，それに対してＳ自身は脆弱な基礎しかもたずにいること，そのため臨床という場に気おくれしていること，そしてそれを直面していないあいまいなＳ自身であることが見出されてきた。これら「臆病さ」「気おくれ」「◎や臨床の場に圧倒されてしまいそうなかんじ」を自分自身の中にもちつつ，まだその本当の姿をスタッフたちにみられたくない，という閉鎖的な態度があることに，Ｓは気付いた。この洞察を経て，◎に対する「自己防衛的」な気持は解消されていた。

総合図式に表わされたＳの内・外認知の広がりが示すように，外界の具体的現実に即した認知は，内面化によって深められ，発展させられてきた。しかし，なおも他スタッフが「スタッフ」の一言で代表されていることは，一面でＳがまだ実際には他スタッフに対して，充分に開かれたありかたに至っていない，ということを示すものと思われる。

8. 他スタッフの結果に関する注釈

なおＳ以外のスタッフについての結果を記す余裕はないので，参考までに他の１スタッフ◎の図式について簡単に述べると，カード式投影法では，１位カードは「使命感」→「不安」に，２位カードは「積極的」「不安」→「使命感」「期待感」へと変化している。第２段では１月に「絶望感」が現われ，◎の◎に対する認識の厳しさがうかがわれる（表５参照）。

二者関係図式（心理的図と理想図）は表６のとおりであり，自己像単純図式のコマの距離，枠の開きは表７のとおりである。二者関係図式では心理的図，理想図ともにコマの配置（向き）に一貫性がみられる。また自己像単純図式で，◎のもつ図式の意味づけ（シエア）におい

表5　カード式投影法におけるQの使用カードの整理

	1段目			2段目
	1位	2位(右)	2位(右)	
6月	使命感	積極的	不安	義務感，意気ごみ，自己満足
7月	意気ごみ	不安	期待感	積極的，使命感
9月	期待感	不安	意気ごみ	自己満足，使命感，自信がない
11月	当惑感	不安	義務感	疎外感，挫折感，使命感
1月	不安	使命感	期待感	当惑感，意気ごみ，絶望感
3月	期待感	意気ごみ	絶望感	不安，使命感，自然さ

表6　スタッフQの二者関係図式の変化

	心理的図		理想図	
	距離	コマの配置	距離	コマの配置
6月	2.5（cm）	c－b型	0（cm）	d型
1月	4.4	b型	0.8	d型
3月	5.7	b型	0.6	d型

表7　スタッフQの自己像単純図式の変化

	コマの距離	枠の開き
6月	5.5（cm）	10.8（cm）
1月	11.9	8.4
3月	4.9	5.9

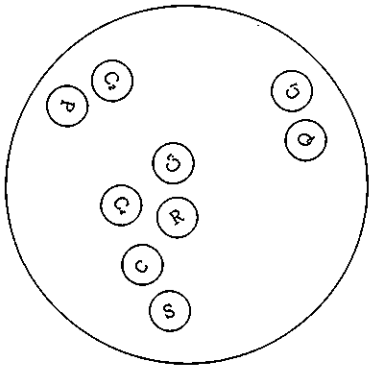

図4－1　Qによる1月play場面図

ての一貫性がみられる。Ⓠにとって針金枠の開閉は，一般的な「受容」ということよりも，治療的関係における自分の方針（態度，アプローチのしかた）の構成，発展に伴っているという。方針が決まってくると枠は閉じていくかんじであるとされ，したがって表にみられる変化からは，Ⓠのⓒに対する治療関係の変化に伴い，方針が安定したものになっていくという傾向がよみとられる。

play場面全体像の6月図（図略）では各担当児―スタッフの関わりが優先し，場面全体は拡散した印象であるが，1月図（図4－1）ではⓇとその担当児2名が場面の中心に配され，他の子どもたちも各々のありかたで場面に位置づけられ，各スタッフがそれに伴って，全体的にいくらかのまとまりがうかがわれる。

スタッフチーム像では，6，1月とも（図略）Ⓡが中心となっていることはSの場合と同じであるが，6月図ではバランスのとれたまとまったニュアンスがあるのに比べ，1月図では，各担当児との関わりが優先されたニュアンスが強くなっている。

総合図式では担当児ⓒとの関わりが6月「接しにくい」，8月「手がとどかない」から，1月「課題訓練」「戦い」へと変わり，「戦い」を支えるものとしては「期待」「仕事」が変わらずに存在し，Ⓠの治療者としての役割意識の安定を表わしているようにもみえるが，Ⓠの内面は6月「不安」，「お互いにさぐり合っている」，8月「いらだ

ち」,「意欲」, 1月「迷い」,「落胆」となっている。なお㊀の背景には㊀の姿を再構成していくいくつかの手がかり「物の見え方」「ミニカー」「ことば」などが増加している。

9. 結　び

前述したように，本研究では治療場面全体の認知を基にして，治療者－担当児の二者関係，集団治療関係，スタッフチーム関係の測定，さらに治療場面を越えた，障害児の治療・教育分野，環境や担当児の生活，そして治療者自身の生活や内的世界などを広く前提とした総合認知までを考察しうる図式を求めたわけである。ここではSの事例研究と一部㊀についての考察を行なったにとどまるが，究極的にはスタッフ各々の図式を整理し，その上で各々が共に関わりあってきた集団治療場面に絶えず戻りつつ，スタッフ一人ひとりのユニークなありかたを求めていってこそ，全てのデータに満足な結論が与えられるのだと思われる。そのユニークさは，各自の図式に対するうけとり方（シエア）から治療場面での担当児への関わり方，治療集団の認知，スタッフチームの認知にまで至るものである。そしてさらに深く考察，自己洞察を経るならば，治療者＝スタッフ＝個人＝生活者＝全体的存在としての人間像までを描き出す，ひとつの視点となりうるであろう。